

編集局日誌

2018・8・10

ヒロシマを歩いて

文化生活部・中咲貴稔

片仮名の「ヒロシマ」は、「核なき世界への旗印」という意味合いで使われるらしい。広島市主催のジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」に参加して初めて知った。

「8・6」までの約2週間、現地に滞在した。コンビニやスーパーの店先には塔婆や盆灯籠が並び、反戦や反核を訴える関連イベントのポスターが、町内の掲示板に多数貼りだされていた。経験したことの無い雰囲気に含まれ、真っ先に思い浮かんだ言葉は「鎮魂」の二文字だった。

戸惑いもあった。発信される情報のほとんどは、被害者側に立ったものだった。戦争や核兵器保有を肯定するつもりは当然ない。しかし、戦争には加害者という側面もある。偏りのない、冷静な伝え方とはいかないものか。難しい課題だと感じながら街を眺めた。

平和記念式典は、想像以上に騒々しいものだった。黙とうをささげる鐘が響く中、会場周辺で反核を訴えるデモ行進の声がやまない。安倍首相の退席時、一部参加者から政治的な意味合いがあるともとれる拍手がわき起こった。この日は、被爆死した無数の人の命日である。心が痛まずにはいらなかった。